

# 年代および性別による死生観の違い —非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して—

長崎 雅子・松岡 文子・山下 一也

## 概 要

20歳以上の非医療従事者269名に死生観に関するアンケート調査を実施した。その結果、死はマイナスイメージで回避できない自然現象と捉えて、心の準備が必要と考えている人が多く、死の準備教育の必要性が示唆された。また、死をタブー視する傾向は、60代以上に多く、時代的背景の影響が見られた。死に対する不安は身体的苦痛などの現実的なことが多かったが、20～30代は「自己の存在消滅」など認識面の不安が多かった。死を意識するきっかけとしては、「大切な人の死を通して」が最も多く約6割であった。50代以上では、体調、加齢をきっかけとして死を意識し、かつ、それに伴う具体的な行動が見られ、死の準備状況の進展がみられた。20代では臓器移植賛成、提供してもよいが約8割であった。性差では女性の関心が高く、死を意識した行動が見られた。

キーワード：死生観, 非医療従事者, 年代差, 性差, アンケート調査

## I. はじめに

人生の終局としての死は、人生と共に育み、親しんできた自己の存在、環境としての人、物、自然などさまざまな愛着との別れであると共に、最も身近な存在として支え合ってきた家族、友人に喪失体験を生じさせる重たいできごとである。従って、人々は長い間死によるつらさや悲しみの重さを測り、日常生活において触れてはならないこととしてタブー視してきた。

しかし、平成9年の臓器移植法の制定、自律・人権の尊重を背景としたインフォームド・コンセントの進展により、医療従事者は、患者や家族に対し、病状や治療について真実を伝える中で、死までの時間をどのように過ごすか共に考え、相互の合意点を目標として支援できるように歩み始めている。従って死は医療従事者にとって日常的行為と直接結びつくこととなり、個人の死生観が問われることとなった。

しかし、このような急激な死に対する価値観

本研究は平成16年度、17年度本学テーマ別研究費の助成を受けて実施した。

の変化に対し、死生観を育成するための教育プログラムは、現状では学校側の判断に任されている。看護の対象である人々の年代別、性別死生観を把握することは、患者・家族に「悪い知らせ」をどのように伝え、その後の生活をどのように支援していくかを考えるための基礎情報として重要である。

ここでは死生観を「死に対する考え方、および態度」と定義した。

## II. 研究目的

年代および性別による死生観の違いを把握する。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象, 期間, 方法

A病院の看護者の家族（非医療従事者）、集団検診の参加者、および公開講座・講演会に出席した269人を対象とした（表1）。公開講座・講演会のテーマは死とは別のテーマである。

研究期間は2004年8月～2005年12月。

質問紙は属性と死生観に関する内容の45項目からなる質問で構成し、研究者3人で作成した。質問紙の回答は非常に思う、思う、あまり思わない、全く思わないの4段階とした。

## 2. 分析方法

質問回答の4段階を「非常に思う」と「思う」を「思う」、「あまり思わない」と「全く思わない」を「思わない」と読みかえ、その後、年代による認識の違いをみるために $\chi^2$ 検定を行った。そしてさらに、年代間で差が見られる項目について、年代を2～3のカテゴリーに分け、 $\chi^2$ 検定をおこなった。統計処理にはSPSS13.0Jを用い、危険率 $p < 0.05$ を統計学的有意とした。

## 3. 倫理的配慮

A病院においては、院長に調査の目的・内容について文書と口頭で説明し、了解を得た。その後、文書で看護者を通して家族に依頼し、同

意して質問紙を返却した人を対象とした。また、公開講座・講演会に参加した人には、文書と口頭で目的と内容について説明し、同意して質問紙を提出した人を対象とした

なお、本研究は島根県立看護短期大学研究倫理審査委員会で承認を得ている。

## IV. 結 果

### 1. 年代差

#### 1) 死に対するイメージ (図1, 図5)

「怖い」が63%～77%、「悲しい」が84～96%、「つらい」が70～87%であり、死のイメージは、全体的にマイナスイメージであった。死のとらえ方として「自然なこと」が83～93%、「さけられない」が86～100%で死は自然なこととして捉えられていた。「心の準備が必要」は

単位：人

表1 対象の内訳

	20代	30代	40代	50代	60代	70-90代	合計
男性	9	15	19	24	20	25	112
女性	21	15	25	42	29	25	157
合計	30	30	44	66	49	50	269

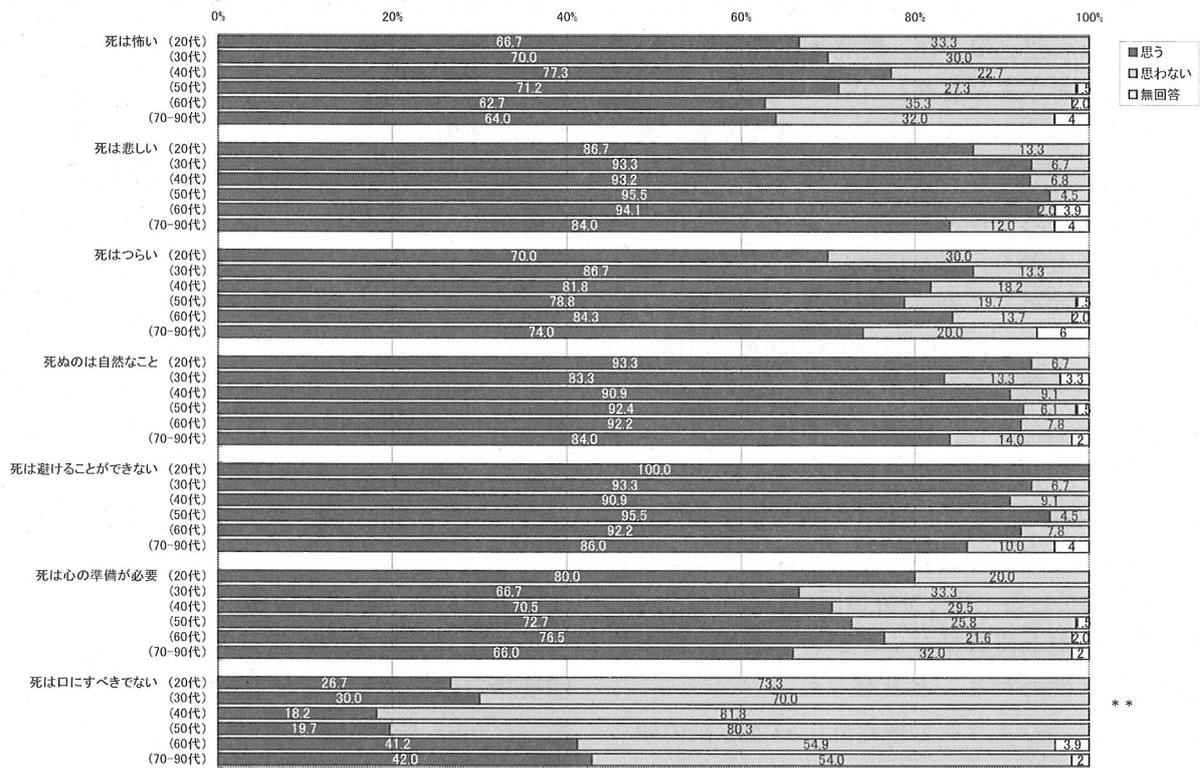


図1 死に対するイメージ

\*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$

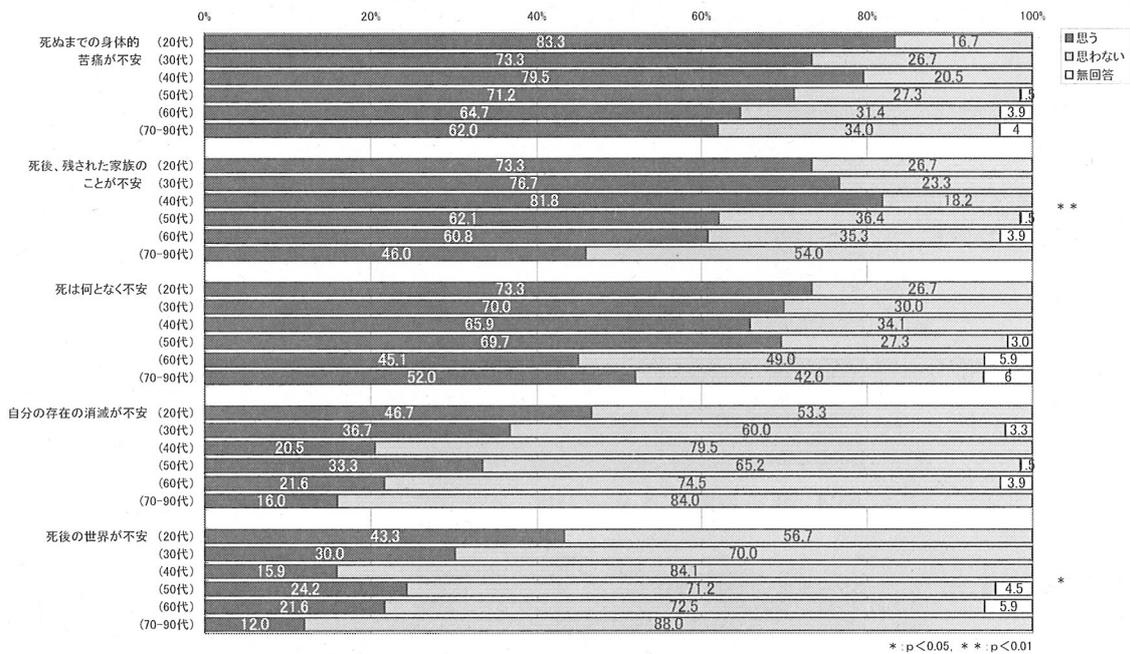


図2 死に対する不安

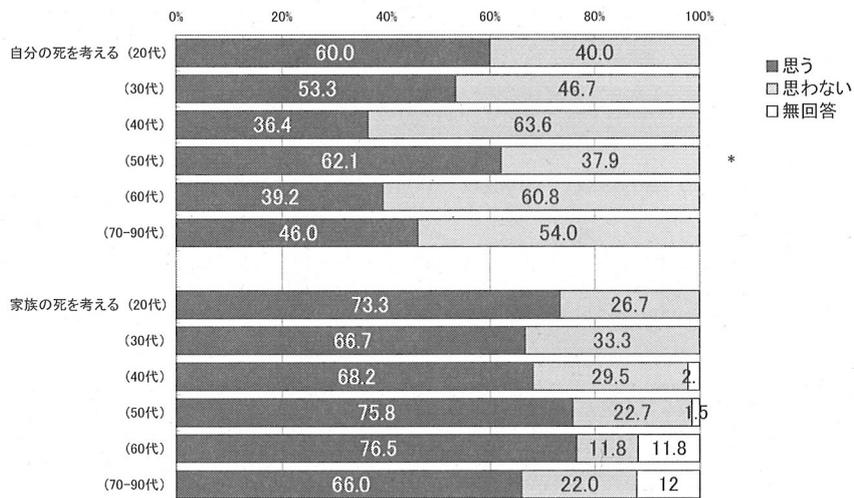


図3 死を考える対象

67%~80%で準備性を支持する回答が多かった。また、「死について口にすべきではない」は年代間に有意差があり、60代以上が「死は口にすべきでない」と考えていた人が多かった。

### 2) 死に対する不安 (図2, 図5)

「身体的苦痛が不安」は全ての年代に多く見られ、不安であるとの回答は62%~83%であった。「残された家族のことが不安」は46%~82%で有意差があったが、20~40代の方が家族に対する不安が多かった。「自己の存在消滅が不

安」、「死後の世界が不安」は全体的には少ないが有意差があり、20~30代の若い人が死を頭で考え、認識としてとらえる傾向にあった。

### 3) 死を考える対象 (図3)

死を考える対象としてだれの死を考えるかについては、年代間での差はみられなかったが、「自分の死について考える」は36%~62%で全体では約49%、「家族の死について考える」は66%~77%で全体では約72%であり、一人称としての自分の死よりも家族の死を考える人が多

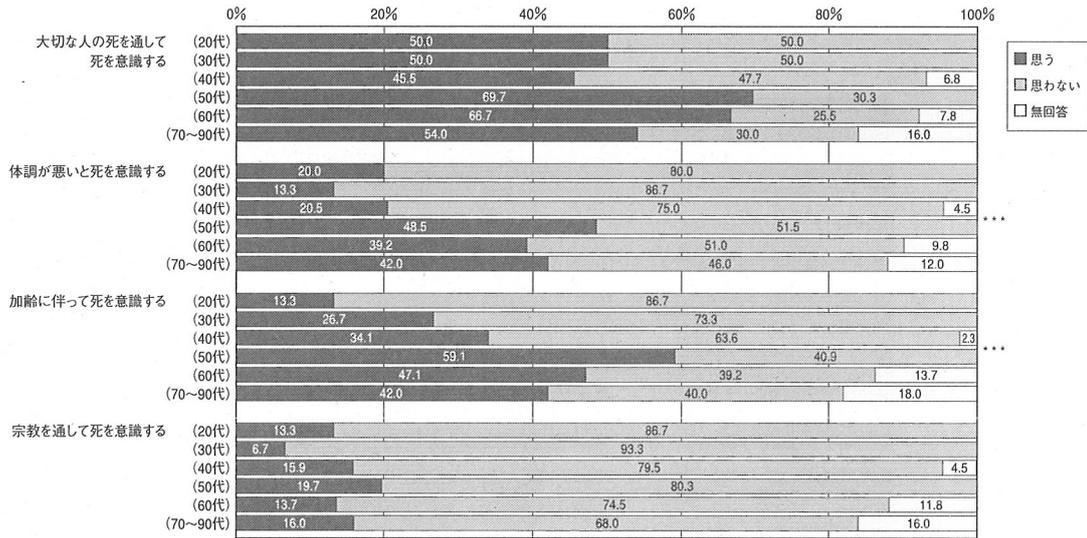


図4 死を意識するきっかけ

\*\*\*\*: p<0.001

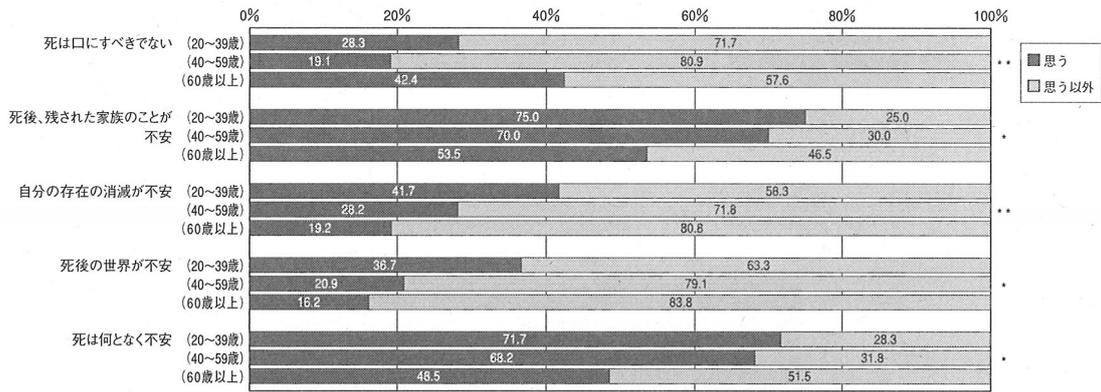


図5 20-39歳、40-59歳、60歳以上での比較

\*\* : p<0.05, \*\*\* : p<0.01

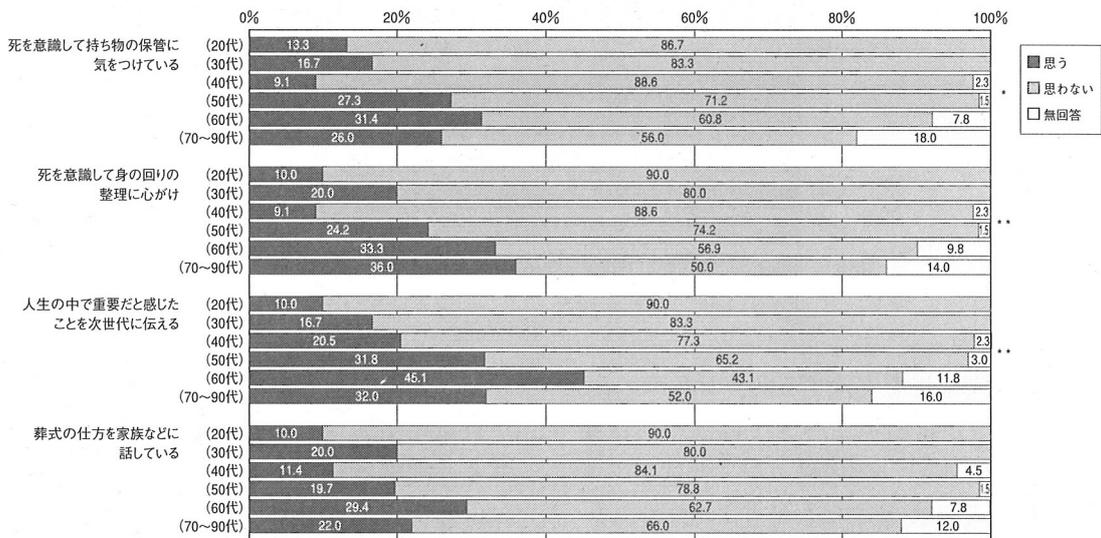


図6 死を意識した行動

\*\* : p<0.05, \*\*\* : p<0.01

かった。

4) 死を意識するきっかけ (図4, 図6)

死を意識するきっかけとしては、「大切な人の死を通して」が最も多く、全体では58%であっ

た。「体調が悪いと死を意識する」「加齢に伴って死を意識する」は有意差があり、50代以上に多かった。また、「宗教を通して死を意識する」は全体では15%と少なかった。

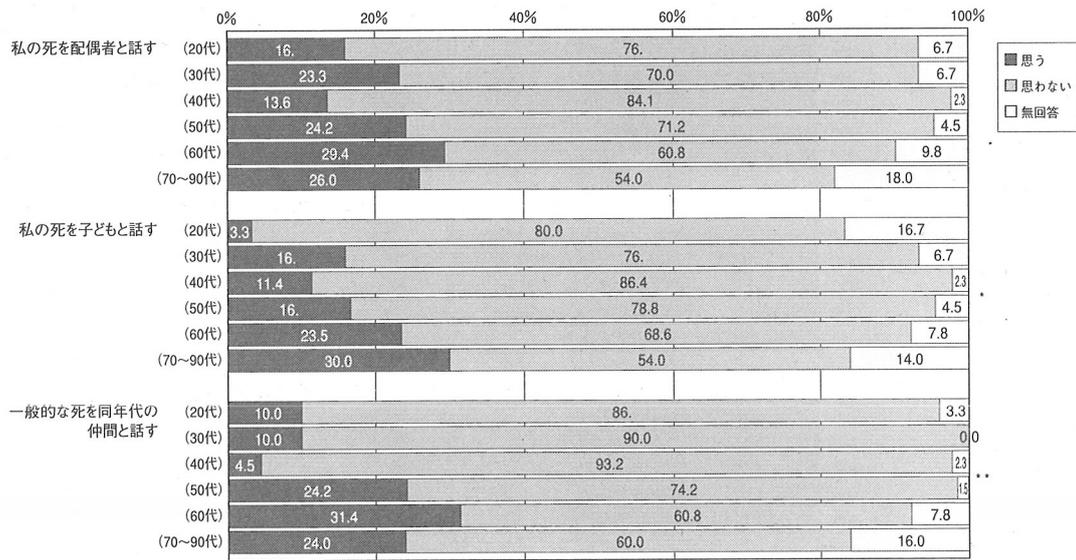


図7 死を語る相手

\*\* : p<0.05, \*\*\* : p<0.01

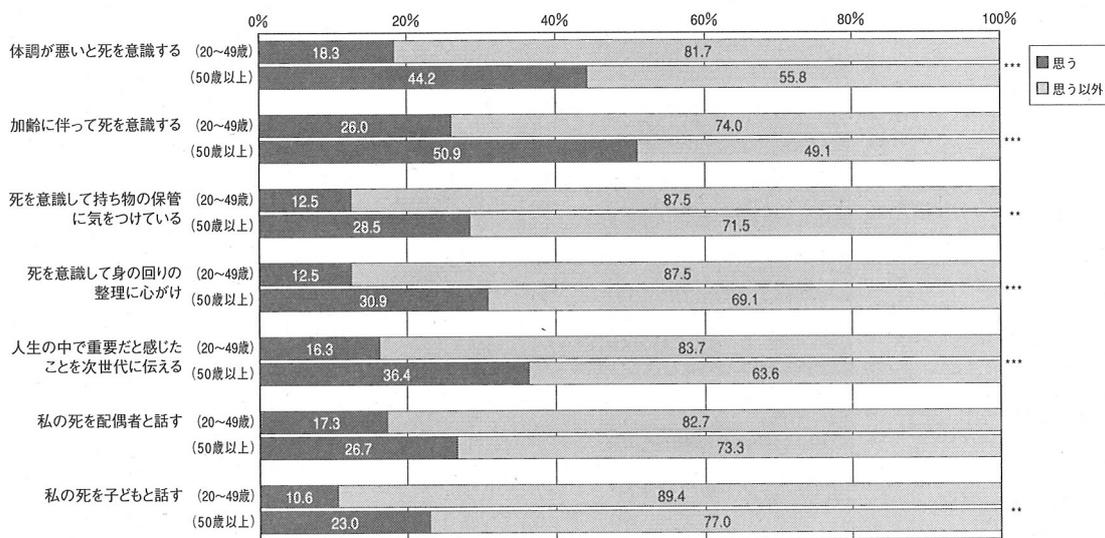


図8 20-49歳、50歳以上での比較

\*\* : p<0.01, \*\*\* : p<0.001

5) 死を意識した行動 (図6, 図8)

「死を意識して自分の持ち物の保管」は全体の肯定的回答が22%、「身の回りの整理をする」は23%、「人生で重要なことを次世代に伝える」は28%、「葬式の仕方について話す」は19%で全体的に少なかった。「死を意識して自分の持ち物の保管」「身の回りの整理」は年代間に有意差があり、共に40代が最も少く、20~40代と50代以上の比較では50代以上が多かった。「人生で重要なことを次世代に伝える」は年代間に有意差があり、20代が最も少く、20~40代と50代以上の比較では50代以上が多かった。50代以上において死を意識した具体的な行動が見られた。

6) 死を語る相手 (図6, 図8)

死を口に出して話す人は、「私の死を配偶者と話す」が全体で23%、「私の死を子供と話す」が18%、「一般的な死を同世代の仲間と話す」が19%であり、全体的に死の会話は少なかった。「私の死を子供と話す」は年代間に有意差が見られ、最も少なかったのは20代の3%で、多かったのは70代以上の30%であった。「一般的な死を同世代の仲間と話す」は最も少なかったのは、40代の5%、多かったのは、60代の31%であった。「私の死を配偶者と話す」「私の死を子供と話す」は20~40代と50代以上の比較では50代以上で多く、50代以上の人が多く会話していた。

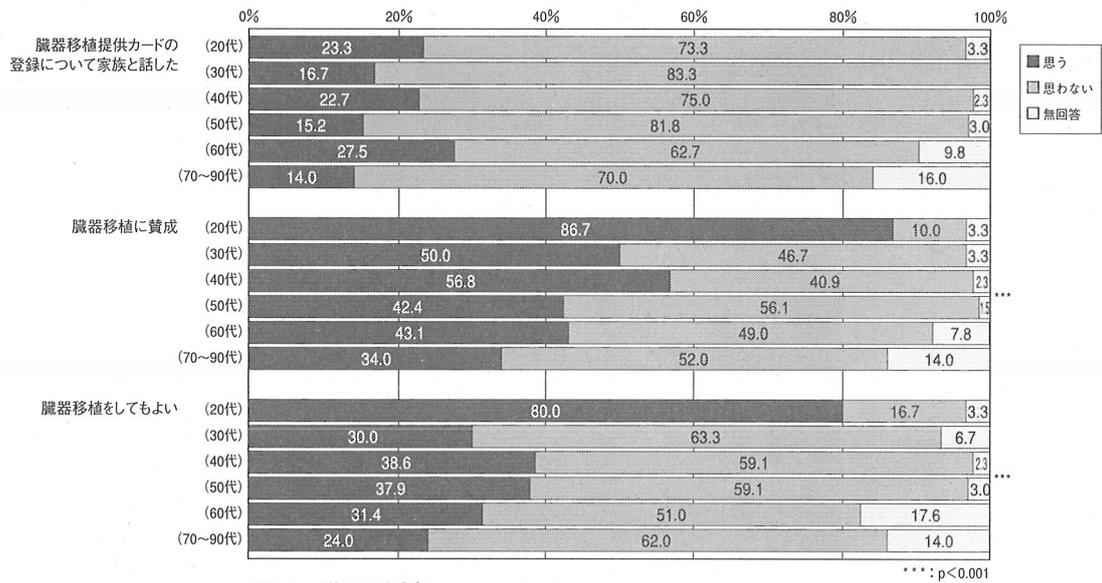


図9 臓器移植について

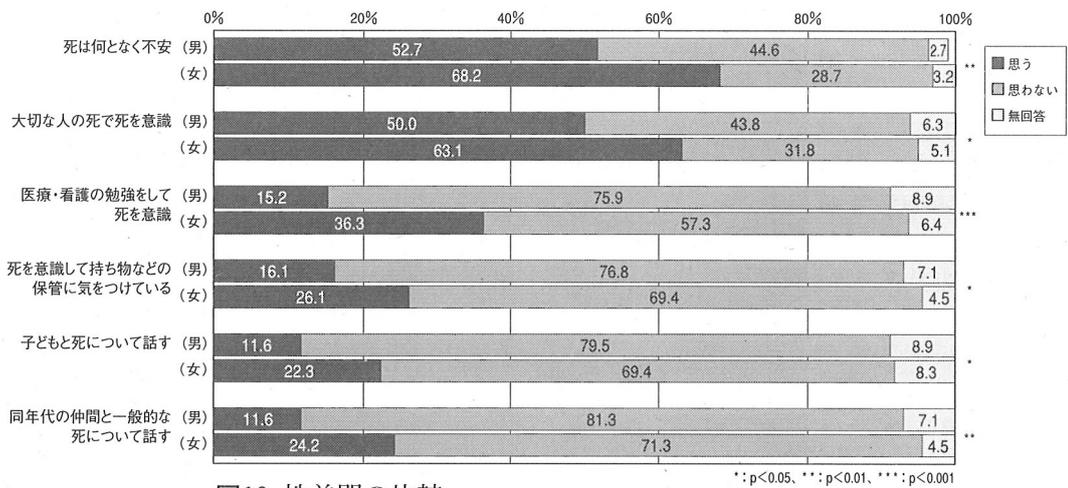


図10 性差間の比較

7) 臓器移植について (図7)

「臓器移植賛成」「臓器移植をしてもよい」は20代が他の年代に比べ高い割合であった。

2. 性差 (図10)

38項目の質問について、性別による有意差がみられたのは、「死は何となく不安」、「大切な人の死に遭遇して死を意識する」、「医療、看護の勉強（講演会を聞く）をすることで死を意識するようになった」、「死を意識して持ち物などの保管に気をつけている」、「私の死について子供と話をする」、「一般的な死を同年代の仲間と話をする」の6項目であり、6項目全て女性が多かった。

V. 考 察

1) 死に対するイメージ

死に対するイメージが「怖い」、「悲しい」、「つらい」とマイナスイメージであるのは、死の意味からすれば当然と考えられる。板倉(2002)は「自己の死に対する恐怖の意識」に対し、80%が恐怖を肯定していたと述べているが、本調査では「怖い」イメージは63~77%であった。そしてさらに、死はさげがたい宿命的なできごとであり、心の準備が必要であると考えている人が多かった。これはアルフオンズ・デーケン(1995)が指摘している死の準備教育の必要性を示唆している。また、死のタブー視につながる「死は口にすべきでない」は60代以

上に多く、年齢による死に対する意識差が見られた。これは近年、「いのちの教育」等により、生に相対する概念として死を題材としたドキュメンタリーやドラマがマスコミで広く報道されていることの影響により、若い世代においては抵抗が少ないと考えられる。一方、60歳以上の人は実際に第2次世界大戦等の戦争、貧困、不衛生な環境を原因とした悲惨な死を体験した人もあり、死のイメージがより否定的に傾いている影響もあると考えられる。

## 2) 死に対する不安

死に対する不安は、各年代共に死を迎えるまでの身体的苦痛や家族に関することが多く、現実的な不安が多かった。しかし、20代、30代においては、自己の存在消滅や死後の世界に関する認識面の不安が他の年代よりも多くみられた。また、本調査でも宗教による影響は少なかったが、日本においては宗教が、人生観・死生観に及ぼす影響は少なく（新村，2001）、加齢や健康状態によって死を意識することが多いため、現実的な不安が多いと考えられる。従って、健康状態に問題が少ない若い年代においては、頭で死を考える傾向があり、認識面の不安が多く出現していると考えられる。また、「自分の死について考える」の質問に対し、全体の肯定的解答は49%であるが、20代は60%、30代は53%で若い人に多い傾向にあり、板谷（2002）が述べている死を考えるのは青年期に多いとの傾向が一部見られた。死に対する不安、つまり「残された家族のこと」、「自己の存在消滅」、「死後の世界」、「何となく不安」の全てについて、60代以上は他の年代に比較して少なく、向老・老年期における死の概念の発達が伺えた（杉本，2004）。

## 3) 死の準備状況

誰の死を考えるかについては一人称の自分の死が全体の約5割であるのに対し、家族の死は7割であり、どの年代も家族の死を考える人が多かった。これについては、自分という主観的な死よりも、他者の死として客観的に死を考える傾向とも考えられるが、日本の文化として家族の依存関係が強いため、自分を支えてくれる大切な存在として家族に対する思いの強さの反映とも考えられる。

死を意識するのは、「大切な人の死を通して」が全体の58%を占めていた。杉本（2004）の調査では、「自分の死に対する考えに最も影響を与えたのは」という質問に対して、最も多いのが「身近な人の死」66%であり、同じ傾向にあった。

50代以上は、体調や加齢に伴って死を意識する傾向が見られた。森末（2003）は非医療従事者の死に対する意識調査から、死の意識や態度は親近者の死や加齢とともに変化する自己の健康状態によって形成されていたことを報告しており、本調査と同様の傾向であった。そしてさらに、50代以上の年代が40代までの人に比べて身の回りの整理や持ち物の管理、次世代に大切なことを伝える等、死を意識した具体的な行動が見られた。これらは、50代、60代は親族を看取る機会が多いことや、加齢に伴う体力の衰えなどが影響し、死を身近に感じ、死の受け入れ準備が始まっているためと思われる。また、死について会話をするのは、全体的に少なかったが、20～40代よりも50代以上がより言葉にして話している傾向があり、加齢に伴い死が現実的な関心として増加していることが伺えた。と同時に、日本の文化として、悲しく、つらい体験に対しての否定的傾向が根底にあり、日常生活における話題としてはまだ語られていないことが伺えた。

木内（2004）は高齢者は終末期の迎え方について希望は持っていたても他者に伝えている人は少ないことを報告している。医療従事者は、人々が死の迎え方の希望が表出できるように支援していくことが今後の課題である。

## 4) 臓器移植について

「臓器移植に賛成」は、20代が他の年代より圧倒的に高率で、かつ臓器移植をしてもよいという意志表示が見られた。20代が高率であった理由としては、生に対する意欲の反映の他に、新聞やテレビ等マスコミの影響が考えられ、時代的背景が影響していると思われる。また、50代以上で臓器移植をしてもよいと意思表示している人が2～4割弱程度見られた。臓器提供については、臓器ごとに提供者の適応年齢があることから、臓器移植普及のために、臓器提供が可能な年齢について、人々の理解を得るための

啓蒙活動の必要性が示唆された。

#### 5) 性差について

性差が見られた「死は何となく不安」, 「大切な人の死に遭遇して死を意識する」, 「医療や看護の勉強(講演会)を通して」の3項目から見ると, 死に対する関心度は女性が高く, 田中(2001)の報告と同様の結果であった。また, 「死を意識して持ち物などの保管に気をつけている」, 「死を子供と話す」, 「同世代の仲間と話す」からは, 死を意識した具体的な行動が見受けられる。女性が死に対する関心が高く, 具体的な行動に結びついている理由は, 日本の社会の中では, 女性が家庭の中で介護や看護の役割を担っていることが多いことや, 日常生活と深く結びついた習慣などに関する経験的な知識を有していることの反映と考えられる。田中(2002)は老年期に焦点をあてた死生観・終末期医療の意識調査で「死を考える」, 「死の不安・恐怖」の両因子とも女性が男性よりも高かったことを報告しており, 不安と関心は表裏の関係にあると考えられた。

## VI. 結 論

20歳以上の一般の人々を対象に死生観について意識調査をした結果, 以下のことがわかった。

- 1) 死に対するイメージは「怖い」「悲しい」「つらい」などのマイナスイメージであった。また, 回避できない自然現象ととらえられており, 心の準備が必要と考える人が多く, 死の準備教育の必要性が示唆された。また, 60代以上が死については口にすべきでないとして認識している人が多く, 時代的背景の影響が見られた。
- 2) 死に対する不安は, 「身体的苦痛」「残された家族のこと」など現実的不安や漠然とした「何となく不安」が多かった, 「自己の存在消滅」「死後の世界」など認識面の不安は20代~30代の若い年代に多かった。また, どの年代も一人称としての自分の死よりも家族の死について考える人が多かった。
- 3) 死を意識するきっかけとしては, 約6割の人が大切な人の死を通してであった。50代以上では, 体調, 加齢をきっかけとして死を意識する傾向があり, 50代以上では他の年代と比較し

て死を意識した具体的な行動が見られ, 死の準備状況が進展していた。臓器移植に賛成, 臓器移植をしてもよいは20代で約8割であった。

- 4) 死生観の性差は女性が男性よりも死に対する関心が高く, 死を意識した具体的な行動が見られた。

## 謝 辞

調査にご協力いただいたA病院の職員とご家族の皆様, および公開講座などの機会にご協力いただきました皆様に感謝します。

## 文 献

- アルフオンス・デーケン (1994) : 死を教える, アルフオンス・デーケン第1章死への準備教育の意義—生涯教育としてとらえる, 2—64, メヂカルフレンド社, 東京.
- 板谷幸恵, 藤田祿太郎, 棟方百熊, 下八政美 (2002) : 「自己の死に対する意識」に関する認識調査—死に対する意識と死因概念を中心として—, 教育保健研究, 12, 179—187.
- 杉本知子, Imai Kishi Keiko, 金正貴美 (2004) : 死に対する意識の分析—自己の死に焦点を当てて—, 香川医科大学看護学雑誌, 8 (1), 69—74.
- 田中愛子, 後藤政幸, 李恵英, 杉洋子, 金山正子, 奥田昌之, 芳原達也 (2001) : 青年期及び壮年期の男女間における「死に関する意識」の比較研究, 死の臨床, 24(1), 62—68.
- 田中愛子, 岩本晋 (2002) : 老年期に焦点をあてた死生観・終末期医療に関する意識調査, 山口県立大学看護学部紀要, 6, 119—125.
- 新村拓 (2001) : 老いと死の臨床—日本文化の中の老いと死, こころの科学, 96, 25—30.
- 日置敦巳, 田中耕, 和田明美 (2005) : 勤労世代男女の死生観と終末期のケアの期待, 厚生指標, 52(3), 19—23.
- 森末真理 (2003) : あなたと死—非医療従事者の死に対する意識調査—, 川崎市立看護短期大学紀要, 8(1), 67—76.

## An Investigation into how Non-medical People View Death

Masako NAGASAKI, Ayako MATSUOKA and Kazuya YAMASHITA

### Abstract

We investigated ideas about death in 269 non-medical persons older than 20 years old. For results, we found their image of death was negative and they accepted death as an unavoidable natural phenomenon. Everybody thought death education should be necessary. Subjects over 60 years considered discussion about death as taboo and thought this discussion would be influenced by a person's background. Anxiety about death was related to physical pain, but for people in their 20's and 30's, death was thought as the end of physical life in their bodies. Sixty percent of the subjects became conscious of death when they witnessed the death of significant others. For people over 50, their physical conditions and natural aging provided them with consciousness of death and they acted to start developing preparation for death. Organ transplantation was agreed upon by about 80% of people in 20's. Females were more concerned about this than males, and there was a significant difference between males and females regarding ideas about death.

**Key Words and Phrases:** ideas about death, non-medical persons, generation differences, sex differences, investigation

